【研究ノート】

幸田露伴一家の戦争
――幸田文・青木玉の記録と記憶――

多田伊織

戦後の混乱期に小石川蝸牛庵の再建を待たずして亡くなった幸田露伴（慶応三年〔一八六七〕～昭和二十二年〔一九四七〕）は、戦中から床に就くことが多くなり、ほぼ視力を失い、最後は寝たきりになりながらも、著述活動を続けた。しかし、戦時下の露伴の生活の実態は、存外に知られていない。本論は、戦時下からその最期に至る最晩年の露伴の姿を、当時露伴の身近に侍していた家族や編集者の目を通して再構成しようとする試みである。

本論では、岩波版『幸田文全集』ならびに青木玉の諸作品、そして土橋利彦の評伝『幸田露伴』を基礎資料として用いる。[1]

それぞれの成立時期は、幸田文の諸作品、『幸田露伴』そして青木玉の諸作品の順で新しくなる。したがって、それぞれの作品中で同じ事象について記述されていても、執筆時期は異なっており、新しいものは、先行する作品を参照したと予想される。また、土橋利彦の『幸田露伴』は、失明後の執筆にかかり、一々の事実の記述には、幸田文の諸作品を参照した跡が歴然としている。三者の立場について言えば、土橋利彦は露伴家に出入りした編集者であるが縁戚関係はなく、幸田文と青木玉は露伴の身内ではあるが特別に文学の訓練を受けたり専門的な学問を積んでいるわけではない。三者いずれもが、露伴から見れば「素人」である。こうした立場や専門性の違い、記述を始めた時期の早晩があるため、本論文が元とした資料には、それぞれの露伴との距離も重きを置く点も観点も異なっていることが制約となる。しかしながら、身辺の人間から一次資料を得る場合は、いかなる場合も、このような、見方や抱いた感情が異なっていることで生まれる叙述の温度差や距離感の違いは避けがたい。

そのような制約を踏まえた上で、本稿は幸田露伴一家の戦時下

の生活を再構築したものである。

最晩年の露伴の著述を助けたのは、甲鳥書林の編集者だった土橋利彦（筆名塩谷賛、大正五〔一九一六〕～昭和五二〔一九七七〕）である。当初は該博かつ壮大な知識を誇る露伴の要求には歯が立たず、戦時下では資料へのアクセスも物理的に制限され、なかなか口述筆記の役に立つまでには至らなかった。それでも露伴は、土橋を鍛え上げつつ、『芭蕉七部集評釈』を完成させる。

元来気難しい露伴を、老いと病は、身内にとっては、より一層扱いの難しい家長に変えた。時として癇積を起こし、心の古傷を抉るような悪罵を連ねる露伴に直接相対して、文字どおり心身ともに捧げ、日常、身辺の世話をし、介護にあたったのは、次女の文（明治三十七年〔一九〇四〕～平成二年〔一九九〇〕）とその娘の玉（嫁いで青木姓となる。昭和四年〔一九二九〕～）ら女性たちである。露伴は最初の妻山室幾美子との間に、長女歌、次女文、長男成豊と三人の子を儲けたが、歌は猩紅熱で数え年十二ではかなくなり、成豊も肺結核で二十歳になるやならずで亡くなり、残ったのは露伴からは疎んじられがちであった文のみであった。文は、江戸時代から続く新川の酒問屋に縁づくが、家業は時代に乗り遅れてついには産を破り、夫は肺結核を患ったため、離婚して露伴の元に戻った。その時、一人娘の玉は小学生であった。

先にも述べたように、戦時下の露伴一家の生活を俯瞰したものは、管見の限りではこれまであまりなかった。本稿では、幸田文・青木玉の作品を中心に、不足する部分は、土橋利彦の評伝を用いて補い、担当編集者であった小林勇の『蝸牛庵訪問記』も適宜用い[2]、戦時下の幸田一家の姿を再構築することを試みる。そして、戦時下から昭和二十二年の露伴の死の前後に至る、幸田露伴とその家族の営みと文学との関わりを明らかにしたい。

幸田露伴の次女である幸田文は、父の晩年を娘玉と支えた。露伴の亡くなる直前、病床にある露伴の消息について原稿を求められた幸田文は、それが機縁となり、父の思い出を書くことを中心に、作家となっていく。幸田文を作家としたのは、戦中戦後の厳しい時期、足腰の立たなくなった老父の介護を果たした経験によるものと見てよい。作家幸田文を生んだ原動力は、父露伴の存在と、その父を看取った日々である。しかし、ずぶの素人から、いきなり世の寵児となった幸田文は、その境遇に馴染めず、一度、断筆を宣言する。たとえば、断筆宣言の後に、一九四八～九年の作品をまとめて出版した『こんなこと』のあとがきで、幸田文は自らの文業を次のように記す[3]。

私は本、読むこと、書くことの中に生れて育つた。生母は昔風の謂はゆる世話女房型だつたさうな。私も当時の普通どこ

の娘たちとも同じやうに、やはり将来を世話女房になるつもりで、範囲の狭い家事集積のなかで暮らしてきた。父の生命とする文筆の道は、父の性格の激しさといつしょになつて私に嫌悪の心を起させ、学問芸術に向くものをもたせなかつた。それが父の死は私に運命の一変転を齎らして、人からものを書くことを次々に需められた。いつもただあわてて書いた。時間にゆとりの無いうへに生来のせつかちが手伝つたから、書いたものはどもりのやうな章句である。雄弁に過ぎるといふ評もいただいたが、もし雄弁とするならどもりつつするおしやべり、不具のいらだちでもあらうかとおもふ。（略）私は粗忽なものを書いて、いま版にしようとしてゐる。不具な分身を旅だたせるわびしさ、暮れゆく空に色を無くして行く雲を見送るやうなさびしさである。

露伴の「文筆の道」はその「性格の激しさ」と相まって、娘文に「嫌悪の心を起させ、学問芸術に向」かわせなかった。しかし、「世話女房になるつもりで、範囲の狭い家事集積のなかで暮らして」きたにもかかわらず、心ならずも露伴の死後、文は文筆の道を歩まねばならなくなる。文は、自らの文章を「不具な分身」と称し、決して満足できるものとは考えなかった。

幸田文を助けた娘青木玉は、岩波書店から『幸田文全集』を出版するにつき、文章を求められ、全集の宣伝のためにと、作家の道に入った。処女作である『小石川の家』（一九九四年、講談社）は、婚家を出て、祖父露伴の元に戻った母文との生活の記憶が中心である。小学生から女子大生へと成長する過程が、日本が戦争に邁進し、やがて敗れる時期に重なる。

露伴は自らを語らなかった。

今ここに一冊のかたちにならうとするものの、ことのなりたちをおもふのである。亡父はおのれを語らなかつた人のよしである。子はみな早く亡くなつて私だけがのこつた。[4]

それゆえ、幸田文・青木玉の文章は、生きる露伴の姿を身近で見た者の記憶であり、記録である。しかも、戦時下・戦後の混乱期に、足腰の立たない老人を看取った奇蹟のような記憶である。希有な才能を持つ老人露伴を看取った辛い日々があったからこそ、幸田文も青木玉も作家となったと言えるだろう。

しかし、幸田文も青木玉も、露伴の伝記は書いていない。二人の作品に欠落する、伝記的事実については、晩年の露伴の口述筆記を受け持った土橋利彦、筆名塩谷賛が失明後に著述した大著『幸田露伴』で補い、それでも不足する部分は、担当編集者であった小林勇の『蝸牛庵訪問記』を用い、戦時下の露伴の姿と、

それを支える家族の記録と記憶を見ていくことにする。土橋は露伴の下で『芭蕉七部集評釈』の口述筆記を担い、男手のない露伴一家の世話にもあたった。

昭和二十二年七月三十日、幸田露伴は千葉県市川市の菅野の寓居で生涯を閉じた。享年八十歳。世は明治・大正・昭和にわたって活躍した露伴を忘れていた。戦中から死の直前まで、露伴に私淑した内田誠によれば、葬儀に参列したのは、昭和十二年に露伴が文化勲章を受賞した関係でやってきた政治家がほとんどで、文壇からの参列者は数えるほどだったという。[5] 昭和二十年三月に長野の坂城に疎開した露伴は、終戦後伊豆で過ごした後、小石川蝸牛庵の再建までの仮住みのつもりで、市川市菅野の手狭な家に移った。江戸っ子の露伴は、愛する東京には戻れぬまま生を終えたのである。

日本が戦争へ突入した当時、露伴はすでに老境を迎えていた。昭和十六年、露伴は満で七十四歳となる。

> 昭和十六年。武見医師と知る。死にいたるまで見ることになる人である。真珠湾攻撃起りアメリカと戦端を開く。[6]

この年、露伴の健康は思わしくなかった。[7]

去年は目を慶応病院の菅沼博士に見てもらったが、ことしはどうもからだの調子がよくないので小林が肝臓ジストマを直してもらったという武見太郎に見せることにした。小林や岩波の勧めもあって露伴は承知した。武見は蝸牛庵へ来て一応見たが、「もっと詳しく見たいからおつれしてください」と言った。小林からはいろいろ聴いていたが武見を見たのはこれがはじめである。小柄で肥満した人なのにすることは早かった。それから余計な口は利かない。それでいてこちらに礼を致すことは鄭重である。二十三日には文子と小林とに附添われて銀座の教文館ビルの何階かにある武見診療所へ行った。私は数年後に行ったがその階には診療所のほかにもいくつか部屋があり出版社もあった。一階になっている教文館はキリスト教関係の本を扱っている店であった。診療所は診察室と待合室とに分れているがどちらもそう広くはない。診察室のほうには新しい器械がいくつも置いてあり、それを露伴は武見の口早な説明を聞きながら見て廻った。そういうところから察するとこれはほかの患者たちと同じに待合室から呼ばれて診察室へ入ったのではなく、特別の時間を用意されて行ったのであろう。小林が写しているカルテの一部を見ると、二週間ほどまえからこれという原因もなしに突然前に見えるものと自分とのあいだが測定できなくなり、いくらか斜視に

なったのが自分でもわかるようになったこと、それが一つ。ときどき頭痛がするようになったが別に目まいはないこと、それが一つ、胸に圧迫を覚えることが折々あるがその時期は一定していないこと、それが一つ、糖尿病は三十年に及んでいること、それが一つであった。以上がこれまでの容態である。ほかに食欲可良などと出ているが、この食欲がちゃんとあったことは露伴を最期まで救いつづけたのである。からだはどこもかしこも毀れたようになったがただ気と食欲とでさらに何年かを長らえる。これはあとのことである。ここでいくらかでも直してもらいたいのは歩行障害と視力障害とであった。諸種の診察を了えてから武見が言う。「先生のは全身の動脈硬化症を伴った腎動脈硬化症とそれに慢性腎炎が併発したものでして、この病気は残念ながら今の医学ではまだ直すことができません。しかし養生次第で相当長く持たせることはできるのですから」ということであった。「養生のほうから言えば頭はあまりおつかいにならないほうがよろしいです」とも言った。露伴は、「こいつあいけねえ」とべらんめえで返辞した。小林が記してることでは、露伴は歯も悪くして頭痛がするのは歯のせいだと歯医者へかかっていたとある。ともかく方々がよくなくなって来ていた。

文中の小林は、岩波書店の小林勇、露伴の担当編集者だった。小林は岩波茂雄の女婿である。蝸牛庵にはしばしば訪れ、露伴に必要な事柄の手配などをした。[8] 武見太郎は、後に日本医師会会長として、日本の医療制度を壟断することとなる。

露伴は、日米開戦をラジオで知った。

十二月八日。この日露伴は終日書斎へあがらなかった。朝ラジオで聴いた真珠湾攻撃のことを思い、胸が詰まって何もする気にならなかった。小林が来て真珠湾攻撃を話しだす。露伴は聞いていたが、「若い人たちがなあ」と涙を流したそうである。こうして布告に先立って戦争は始まったのである。[9]

このとき同席していた小林は、次のように記す。[10]

この年の秋の終りから、冬にかけての先生の健康はあまりすぐれなかった。太平洋戦争がはじまったとき、先生は終日階下の室におった。そこで戦争の話をした。眞珠灣攻撃の話をしたとき、先生は「若い人たちがなあ。」といい、涙を流した。

この記述を塩谷の文章と比較すると、塩谷の典拠は小林の右の記述だと思われる。

露伴は、戦争を愚かな行為と見ていた。孫の青木玉は、日米開戦後の祖父露伴について次のように記す。[11]

目に較べれば耳がとりわけ遠いとか、耳鳴りに悩むということは無かったが、祖父の耳は、聞きたくない時は聞えなくなるという重宝な耳で、それに気付かず、真面目に重ねていえば、せっかく嫌なこと、つらい目に逢いたくないと念じて静かにしているのに、お前は無慈悲に人の耳をこじ開けて禍を捩じ込もうとする、心無いとはこのことなどと文句を言う。戦争、殊に軍部を嫌って、統制、配給などと言おうものなら、いつからお前は軍部の手先になった。そんなケチな了見を有難がるとは愚劣極まりないと癇癪玉が炸裂する。

しかしどんなに祖父が怒っても戦争は拡大し、中国各地に兵は進められて行った。親類の甥達は召集を受け、近所で毎日のように御用聞きに来ていた魚屋の息子も炭屋の跡取りも、佐倉の連隊へ集められ外地へ行く先も知らされず送り出されて行った。

祖父は自身老いて力なく、国を守るべき息子はとうに先立っている。たまらなかったに違いない。古書を扱っていた人に中国の雲南の地図を取り寄せさせて、新聞やラジオのニュースを聞いて、どこへ兵士が派遣されたか自分も地図の上で道を辿った。この地方はどんな気候で地形はどうなっている。今の季節はどんな風が吹き、雨はどんな降り方をするか、炎熱酷暑、洪水泥濘、ろくな食べ物も無く、風土病に冒されれば全滅の憂き目に逢う、軍を預る者は何を考えているのだ。古くからこの地であった戦さに、かくも無謀な兵の進め方をした者は無い、と怒りと悲しみで活火山のようになった。遂に真珠湾攻撃の特攻隊、人間魚雷、病んで仰臥したまま、白髪も、白くなった鬚も震えて、

「ああ若い者がなあ、若い者が」

と号泣し、私は居たたまれず部屋から飛び出してしまった。

露伴はこの頃、露伴の親戚一同を集めて句会を開いていた。[12]

句会。十二月二十一日。日本はついに交戦したが露伴の句会は続いた。

この句会は、翌年十一月二十九日まで続いた。塩谷賛は、「満二カ年のあいだ露伴は親戚の人々に俳句と俳諧連歌とを教えた」と記す。[13]

明けて昭和十七年、徐々に露伴の健康に衰えが見え始める。[14]

昭和十七年。少年時代からの最も古い友人遅塚麗水が逝く。岩波の大宴会で挨拶する。腎臓を悪くしてやや長く寝こむ。

この年、文学者への戦争協力が呼びかけられたが、露伴は断った。[15]

文学報国会というものができた。情報局の指令にもとづくのである。その会長にと言って役人だの文壇の人だのが幾度でもやって来た。露伴に親しいというところから茂吉も頼まれて来た。文壇の人というのも名前を入れたいのだが久米正雄その他の人々ではなかったろうか。二階から道の向う側が見えるのでそこから見ているとおもしろかったと文子が話してくれたのはこのときのことではなかったろうか。しかし露伴は老齢と多病とを以て断りつづけた。「こういうのは徳富にでも頼めばいいのだ」と言っていた。露伴がどうしてもだめなので露伴の言っていた徳富蘇峰にきまった。わが国が敗れて戦争が終り、こういう役に就いていた人々は汚名を着せられて謹慎させられた。ずっと臥ていた露伴はその後私に、「おれはそういうことが嫌いだからことわり通したのだが、ならないでよかったよ。あんなにひどいことになるとは思わなかったのだが」と言ったことがある。

「文学報国会」について、小林勇は次のように記す。[16]

この十一月三日に岩波書店の創業三十年記念の會があった。（略）世はあげて戰爭一色であった。岩波のこの企てに招かれた人々は、學者、藝術家その他すべてリベラリストと考えられる人々であったから、「自由主義最後の晩餐會」などと取沙汰された。そして（露伴先生は）一場の挨拶をされた。

そのころ情報局の指令で何々報國會というものがしきりに作られた。日本文學報國會ができるときに、先生はその會長になることを交渉された。先生はそのとき老齢、病弱の故をもって、これを受けなかった。役人はもとより、文壇知名の人も先生のところへ就任をすすめに來た。その人々に先生は健康が許さぬの一點ばりで斷ったが、私には、「徳富にでも頼んだらよかろう。」とはき出すようにいった。齋藤茂吉氏は先生と親しいと世間が認めていたので、このくどき役に頼まれた。先生も齋藤氏が來た時には少し弱ったようである。私はその話をきいて、決して就任してはいけないといい、念のために文子さんにもそのことを話した。（略）

そんな必要もなく先生は決してその話を受けなかった。事實、先生の健康は次第に傾いていたのである。

露伴が「文学報国会」に関わるのを断ったのは、健康の衰えと晴れがましい役職を嫌う生来の気質からだったが、結局はそれが戦後、露伴には幸いした。おそらくは岩波茂雄の意を体したのであろう小林勇の進言を、露伴が肯んじたかどうか、それは小林と塩谷の書きぶりが異なっているので、俄には判断できない。塩谷が「二階から道の向う側が見える」というのは、この当時、露伴と文母子は同居していたわけではなく、小石川のすぐ近所に別居していたのである。

年末、露伴は床に就く。[17]

かぜをひいた露伴は十二月のはじめから床についた。いつのころからか露伴は痰性となっていた。年はじめの御進講もそのために御遠慮申しあげた。客があるたびに痰壺を持ち歩いているほどだが、それも病中は度数がふえてその上吹っ切りにくかった。熱もあった。主治医に頼んでいるお向いの山崎医師はすぐに来てくれたが、武見の来診も電話で頼んでおいた。岩波の小林にも連絡しておく。病室にした奥の間には洗面器の湯を火にかけて湯気を立たせる。しかしなかなか直らない。四日、岩波へ出かけた斎藤茂吉は今度出る「源実朝」の用事を足したあとで小林といっしょに見舞に来る。中央公論社の松下英麿がさきに枕頭に来ている。ここまでは茂吉の日記によって書いたが、「蝸牛庵訪問記」で補うと、「中央公論」では「香談」を貰い、「アララギ」にも歌に関するものを何かあげる」と約束した。診察がはじまったので松下は帰る。診察のあと小林が露伴にしばらくついていた。小林が帰ろうとして玄関へ出るとそこで文子が茂吉に病状を聞いている。すると山崎が往診に来たので二人も奥へ行く。小林はひとりで帰った。奥では山崎の診察がはじまる。茂吉と山崎とは知った中なので、茂吉のほうでは露伴の話を聞きながら手帳に覚えをつける。（略）茂吉は十七日にも露伴を見舞った。途中で山崎医師に出会ったと日記にあるが行く途中か帰る途中か分明でない。「風邪いくらかよい」とあるのは、茂吉は自分もかぜをひいてるのであった。露伴のほうは腎臓が弱っているのだが、肺炎にならずにすみそうである。（略）大みそかにはまだ全快していないのに床をあげさせて風呂へ入ってしまう。これは昔からの露伴のやりかたで、始まり終るという日にはきっちりと起きるのである。われわれの知っているのでは明治四十四年の終りにもまだ病気だったのを起きて元日には大島へ出かけることもあった。このときにも年の終りに起きて元日には年賀の客を迎える。

露伴はひとまず床払いをし、病中にあっても各社から原稿を依

頼されている。だが、老いは露伴を死に近づけつつあった。

露伴の健康が、どうやら抜き差しならない状態に傾き始めるのは、翌十八年からである。[18]

昭和十八年。喜寿の年である。うちうちでは祝いを延ばしたが大河内邸で宴が張られる。野間賞を貰う。

新しい年の一月、中央公論社から「蝸牛庵聯話」が発行になった。「中央公論」の昭和十三年十月号から載りはじめて十六年六月号に終るまで足かけ四年を経たもので、しばらく続いてまたしばらく休んでというふうに続いた。できて来た本を評して露伴は、「紙の玄米だ」といったが、まっ白な紙はどこの出版社にもなくなったのだからしかたがないとしてほかのところは乏しいものをまずはうまく使って品は悪くなくできていた。

「紙の玄米だ」とは露伴一流のうまい言い方だが、すでに紙の供給事情は悪くなっていた。「乏しいものをまずはうまく使って品は悪くなく」と見るのは、土橋利彦の編集者の立場からの見方である。

この頃から、露伴の視力は衰え始める。[19]

白内障は全く見えなくなれば手術ができるが露伴はとにもかくにもまだ見えていたし、それに糖尿病があっては手術はかなわぬのだそうである。それでも手術がしてもらえるかどうかという確かめに、文子に連れられた形で東大へ行った。そのときの医師が庄司博士だったのだろうと思うが明らかでない。診察を丁寧に受けたあと、「手術はやはりできませんですなあ」と言われた。幾度も眼球に注射をしてくれた。文子が見ていると、眼球の膜の下へ注射された液がしばし散らずに露の玉のように盛りあがっているのが、父を面変りさせて窶れたように見せた。タクシーの便がないので眼科から正門まで歩かなくてはならなかった。露伴は治療のあと疲れたのでそろりそろりと歩く。初夏の日が暖かく朴の花が咲いている。その花も露伴には見えないのである。「そのへんに腰かけがあったら休みたいがな」と言う。露伴は額に薄く汗を掻いていた。そのくせ木蔭で休んでいると、「肌寒い感じがする」と言うのであった。そのとき、「目が衰えると気も衰えるものだね」と感慨を洩らした。

糖尿病が持病の露伴は、白内障の手術に耐えなかった。「朴の花が咲いている。その花も露伴には見えない」という叙述は、露伴の視力の衰えがかなり進んだことを示す。朴の花は大きく、辛夷

や木蓮ほどもある。それが見えないのだから、現代の視力測定では、数字で測れない程度の弱視、手動弁や手指弁くらいに落ちていたと推察される。これでは手の届く範囲くらいがなんとか見えるばかりだ。

空襲が始まった。露伴の妹延子が、娘文を通して、疎開を勧めてきたのはこの頃であった。伊東に遊ぶ露伴の元に文がやってくる。[20]

空襲の噂に東京がざわつき出した頃、春はまだ深く、父はひとりで伊東の風光を楽しんでゐた。或日、私は糀町の叔母に呼ばれ、「親子離ればなれにゐてもし不慮のことがあつた時には、おまへは申しわけもあるまいし、かつは私達にしても疎開如何についての兄さんの御意見も伺ひたいから、一トまづ帰京を促しては」と云はれ、尤もなことに思ひ、早速迎へに行った。

来意を聴いて機嫌は曇つてしまった。「お延はとにもかくにも一生を芸で押し通して来てゐる、しかももう七十を過ぎてる身で、死について考へた機会は幾度かあつた筈だ。空襲はそりや恐ろしいものかも知れないが、だからと云つてわざわざそれでおまへを迎へによこす程うろたえていゐ筈は無い」ときめつけ、「又おまへにしてもをかしな使に来たものだ、小さい時から母親に死なれ、弟を送り、先頃は縁にも離れてゐる、多少とも人生の磨礱にあつてゐるぢやないか。も少しはわかつてゐると思つてゐた」といやな顔を見せて煙管を取つた。同行の親類の女人はしらけきつて迎合追従的な無意味なことばと笑顔を向けたが、これは案の定父の癇を煽る結果となつた。「生死を云ふのならおまへ達の分際でにたにた面は不謹慎だらう」と開直られ、これは大変なことになつて来たと、尻込みすることもできずかしこまつた。「一体、爆弾で砕け死ぬといふことが何なのだい、イヤサ死ぬといふことをどう思つてゐるのだ」と一語は一語にましてきびしくなつて来、しどろにする返事は更にことごとしく気に入らるべくもなかつた。問題が生死のことであつたから、はからずも知つた子の不覚さは、それが子ゆゑにこそなほ許すまじき気勢で、東西古今をたてよこに織りなし、畳みかけ畳みかけ、長い時間をしやべつた。はじめ私は恐れて堅くなり、やがてただその大河の勢をもつて語られるところに全く呑まれ尽して、いたしやうも無かった。いつか話は又もとに戻され、電撃的なことばは私を刺した。「もしこのわたしの身体が道端で膨らみあがつて爛れ死んでゐたら、どうだと云ふのか。おまえは発狂でもする気か」と。反射的に胸に描いた猛火の図にぞつとし、「そんなのいや、もうやめて」と歎願し、「いやでは

済むまい。そんななまぬるつこいことでいいと思ってるか。死の惨さ厳しさにも徹し得ないおまへらが、安全のどうのと憚りも無くしやべり散らすとは慢心の至りだ」と浴びせられ、私はへこたれきつた。

「もういいから湯にでもはひつておいで」と、自分から石鹸を取つて渡してくれたりした。湯舟に寄つてゆつたりとし、思ひかへし、そしてはつと狼狽した。これは一体どうしたことだ、あんなに話してくれたあれは何だったのか、何一ツ覚えてゐない。あれほどの熱をもつて説いてくれた数百語は、どこへ行つたのか、まるで手がかりも無いまでに忘れてしまってゐる。皆無であった。当惑の底に浮いて来たものはただひたすらに、おとうさんと呼ぶ子の情であつた。死なれたくない、怪我もさせたくない、生きてゐてもらいたい、そのおとうさんである。生き身の恩愛、親子の絆、何を聞き何を忘れて、ここにこの心があるのか。知らぬ。不敵といふにはか細く、慢心といふには悲しい。業とならば、よし苦にも裂けよ、執念ならば地獄にも墜ちよ。あはれこの心をつきとめて、も一度生死の話を聞く折をもたうと念じて、翌日は一人帰京した。

父を守りたい一心で文は疎開を申し出たのだが、それははねつけられたのである。「はつと狼狽した。これは一体どうしたことだ、あんなに話してくれたあれは何だったのか、何一ツ覚えてゐない。あれほどの熱をもつて説いてくれた数百語は、どこへ行つたのか。まるで手がかりも無いまでに忘れてしまってゐる。皆無であった」という文の述懐は、父露伴の該博な知識についていくことができず、せっかくの諭しの言葉が、ただ滑り落ちて消えてしまった悲しみに満ちている。露伴は文に学問を授けず、その機会も与えなかった。文は『こんなこと』の「あとがき」に見たとおり、父の性格の厳しさとその生命とも言える文筆の道への嫌悪感から、学問芸術へ心を向けなかった。これは青木玉にも共通しているのだが、文も玉も、時に迸り出る、学識に裏打ちされた露伴の言葉を真に理解していたとは考えにくい。理を尽くして露伴は説いただろうが、その言葉はそれこそ一々が典故を持っており、文化的背景についての教養を身につける機会のなかった文と玉にとっては、そうした露伴の珠玉とも言えるような言葉は、耳で覚えた言い回しでしかなかった。後に、青木玉が露伴のおそらく「蔗境」という言葉を聞きかじって、朝日新聞の日曜版に連載していた文章に「しょきょう」とのぼせたときに、平仮名でしか書き表せず、元の漢語に行きつくまでに時間が掛かったことがある。[21]

このことは、文の死後に至っても、露伴と文および玉母娘の間で言語面での断絶がずっと続いていたことを示すのである。もちろ

ん、露伴の枕頭には意味を調べるのには必要な辞書は置かれていたが、文にも玉にも、それを参照するという習慣が身についていなかったのである。幸田文と青木玉の文章を読むとき、言語の断絶が存在することを十分念頭に置かねばならない。

文が物心ついて以来、この親子は、先程見たような行き違いが何度とあり、それが文にひがみ、恨みを生んでいた。文は述懐する。[22]

父はその母に愛されざるの子だつたと、父自身云つてゐた。それだのに、おばあさんの亡くなつたとき号泣して、私と弟はびつくりして笑つてしまつた。私も父に愛されざるの子だと思つてゐた。延子叔母ははつきり云った。「おとうさんは文ちやんをかはゆくないやつだとおつしやつたよ。かはいかつた子はみんな亡くなつて文ちゃん一人残つて、泣いたりおこつたりしながら、それでもおとうさんのお世話してゐるだろ。それを思ふとをばさんは蔭ながら旗を棹つてるよ。」いとこたちと違つて遊芸もつけられず学校成績も芳しくない私の、いやだいやだとおもつてゐる家事婦としての資格で叔母に応援されたことは、私を忍耐させ慰めた。（略）ひがみ根性ばかりでなく、事実私はかはゆくないところのある子だつたらしい。疎くされたことは悲しく、悲しみは恨みに生長し、年とともにいよいよ頑なであった。私はほんとに父に愛されたかつた。そのゆゑに恨みは深く長かつた。（略）

愛されざるも愛されるも、もと二個でない。愛された子も愛されざる子も子、愛された子にも愛されざる子にも親は親、すべての子はその父の愛子なり。父に詫びたく思つた。わが恨みのゆゑにわが心を長く汚して、つまらないことをした。感心屋だの泣虫だのと云はれてゐる私に、涙も感激もなくて手持無沙汰のやうだつた。喜びを分析すると、澄むとか洗ふとかいふ部分があるものだらうか。解脱といへるかどうか知らないが、永いあひだのものがふつと気の変るときは、感激やら涙やらの伴奏なしに、そのことだけが静かについと折れるのだらうか。

実際に、『流れる』以前の初期作品を読むと、幸田文が幼少の頃から、大人たちにとってはいかに扱いにくい子どもであり、間の悪いところに居合わせる不幸な巡り合わせであったかが克明に描かれている。しかし不思議なことに、幸田文本人は、自ら書いた文章の本当の意味合いがよく理解できていないようで、この記述のように、何度も作品内で「なぜ自分が受け入れられなかったのだろう」と問いかける。そこから考えるに、幸田文の初期作品の特徴は、「見たこと、聞いたことを書きつける」のであり、自身

が超越者として作品世界を構成することは少ない。幸田文は、自身の書いたものがどのジャンルに属するかについても、思い惑った。たとえば、一九四九年に発表された「勲章」の扱いについて、幸田文は後に次のように記している[23]。

随筆といおうにも、小説といおうにも、とにかく私のしたことは「そのとき書けたから書いた」といったものなのである。（略）戦後十年ほどの、なにやらこしゃこしゃと書いていた期間のことを思うと、ぞんきなことをしちまったなあ、という悔みがくる。（略）

文藝春秋の上林吾郎さんにも駄々をいいかけたことがあって、忘れない。「勲章」という短いものを書いたのだが、上林さんはそれを小説の欄へ組むといい、わたしはいつもの通りのものだから小説とはちがうだろうと言い張った。随筆ならワクのことが気にならないが、もし一旦小説と銘うたれたらそのあとがどんなことになるか。よくも知らない小説のワクに追いこめられて、さぞ気ぶっせいなことだろう、と恐れたのである。

押し問答の末に上林さんがえらく深いえくぼを刻んで、折れてくれた。そのえくぼを見ていて「これはしまった、駄々に等しいことを言い張った」と悟らされた。その時書けたから書いたというだけの、微々たる短文章なのだから、上林さんほどのひとに小説といわれたら、なぜ素直に小説にしておかなかったかとおもう。

「随筆か小説か」というのは、『幸田文全集』を編むときにも問題になり、編集協力者から青木玉に質問が出た[24]。

――全集の編集の中で、まず話題になったのは、随筆と小説との区別を文自身がどのように考えていたのだろうかということでした。たとえば幼少期の思い出を綴った『みそつかす』は小説というよりも随筆として受け取る方が自然なのでしょうが、これを受ける形の長編『草の花』は、初出誌では「みそつかす」の続編として連載されています。そして文の代表的な小説の一つと見なされている『おとうと』は「草の花」の続編として当初、発表されているんですね。また、「姦声」も初出誌では、「随筆」と銘打って発表されています。幸田文の作品の、何を随筆あるいは小説と考えるか、読者自身が試されるところがあります。こうした点については？……

青木　母の書いたものが評判になって編集者がどんどん家にやってくるようになると、今度はぜひ小説をという話になるわけです。でも、母は最初、小説なんて私には書けない、の

一点張りでした。「勲章」という作品を『文学界』に掲載するときに（略）結局、母の言い分が通って随筆欄になりました。

そんなふうだから、そばにいる土橋さんがやきもきして「奥さん、随筆と小説との違いは……」って長い講義をはじめる。（略）「そりゃそうかもしれないけれど、私には小説は書けない」と押し戻し、（略）このことで何度も土橋さんが母を説得しようとして、失敗していたのを思い出します。

――ジャンル論の講義を聴いて反論している幸田文というのは新鮮な像ですね。（略）

青木　（略）土橋さんとの間で、随筆か小説家というやりとり以上に、「素人と玄人の境」という話をよくしていましたね。

――そこでもやはり納得されない？

青木　そうですね（笑）。土橋さんは一生懸命、（略）講釈するのだけれど、母は「そうかもしれないけど、私は玄人じゃない」。玄人の物書きさんは何が書きたくて書き続けるのだろう、また何かを入念に積み重ねて書くというのはどういうふうなものなのだろうかといった疑問は、おしまいまで持ち続けていたようです。

娘青木玉の見るところ、最後まで「私は玄人じゃない」という意識を持ち続けた幸田文の、初期の作品にあっては、語り手と自身とは未分化か、十分分離されてない状態である。右の示すように、「随筆といおうにも、小説といおうにも」「その時書けたから書いたというだけ」であり、自覚的に作品を構成する姿勢は窺えない。ただ、しかしながら、その未分化な状態が、「身を以て語る独特の力強さと魅力」を作り出しているのである。この点については、「おじ」が幸田文に指摘している。[25]

おじは私が書いた最初のころ、読んでくれて「お前の文章はまことに行儀のわるい文章なので、読んでいるこちらは肉親の絆にひかれるせいもあって、はらはらさせられて困る。しかも、もっと困ることは、その行儀のわるさを直せともいえないことだ。なぜなら、行儀のわるいところが、おまえの文章のいのちみたいなものだからだ」とこまごま教えてくれた。このおじもいまはもういないが、私はいまになってしみじみ、自分のしたことが、行儀のいいものでなかったことをおもう。

この文章が書かれたのは一九六二年、文中の「もういない」「おじ」は、一九五四年に亡くなった露伴の弟、幸田成友であろうか。「おじ」の「行儀のわるいところが、おまえの文章のいのちみたいなもの」という指摘、すなわち文章の力の根源には、文や玉の言語を底支えしている、露伴の強固な言語世界がある。座談の名

手と称された露伴の口跡が、文や玉の文章に遺され、独特のリズムを形作っているのだ。露伴の口跡の持つ生き生きとした魅力は、おそらく露伴一代にしてなったものではあるまい。御坊主衆であった幸田家の「家学」「家風」が無意識のうちに受け継がれた、賜物でもあろう。明治維新と前後して、かつての幕臣や定府詰めの士族の多くが去り、田舎者が闊歩する町となった首都東京で、そこに生きる新時代の人々のための人工言語として磨き上げられていった森鷗外の日本語と対極にあるのが、露伴そして文、玉の文章である。鷗外の日本語については、江戸生まれの漱石とのそれと比較して、次のような指摘がある。[26]

大野　私は鷗外の小説を読むと、非常に肩をいからした東京の標準語を感じる。ところが『明暗』を読むと、ああ、東京の言葉でしゃべっているという印象なんです。結局明治以降の日本の文学では東京の言葉が基礎になっている。しかし作者の生まれとか、育った場所が、目にみえない。作品全体の文章の流れ、つまり、文体を決める。意識的に東京語を学びとって、きちっと日本語を書く作家と、たまたまそこで育ったために楽に東京の言葉で書く作家。二つあるのではないですか。

石川　それはありましょうね。夏目さんなどは楽に使っている。『坊っちゃん』などはとくに。

丸谷　鷗外の小説や評論は無理していて、文体が冷たい。何でも書けるすばらしい文章だけれども、親しめないですね。ちょっとぐあいが悪いのは、背後に生活のない、人工的な文体だということです。漱石の文章は、何でも書けるわけじゃないけれども、温かくて親しみやすい。背後にきちんとした文明が生活としてあって、それを存分に利用していますね。

大野　私が子供のときに寄席で聞いたおしゃべりをあの文章で思い出すんです。ところが、鷗外はヨーロッパの文明を漢字によって取り入れて、胸張って漢字を使い回す。どこかに無理があるんですね。

石川　鷗外さんが東京語でしゃべるのは、ロシアの昔の貴族がフランス語でしゃべったのに似ている。ちょっとよそよそしいところが。

江戸生まれの露伴の日本語も、漱石と近い位相にあるだろう。

露伴の視力の衰えは、翌十九年、のっぴきならない状態になる。それのみならず、床を離れられなくなった。[27]

昭和十九年。白内障で原稿を書きわずらい口授して執筆させ

る。病床で足が立たなくなる。死にいたるまで。

露伴の視力の衰えは、夜に顕著だった。

晩になると目が一層見がたくなるので大きな字の詩の集などを見ながら酒を楽しむ。[28]

目の具合がよくないために、仕事が進まなくなっていた。八月、土橋利彦が、伊東に避暑する露伴を訪ねた。

「曠野評釈」が半途で切れたのを惜しがって、「私の筆記でよろしければ御口述くださいませんか」とこの人は言う。目が大ぶ悪くなって時に文字が先方へ通じないのでやめたとさきに言ってあったからである。「だがね君、これは岩波の雑誌へ載って岩波から本にして出すのだから君の店のためには一向にならないよ」と言うと、「ようございます」と答える。おかしな本屋だなと思っていた。そうしたら今度は自分の店からの頼みであった。「三田文学」をうちから出すことになったのだがそれに何か書いてくれないかというのである。「三田文学」は小泉信三が塾長をやり弟の成友もかつてそこで教えたことのある慶応義塾の文学雑誌で、三田というのはその大学が存する地名である。「それでは調べて筆記してくれたまえ。そこいらに「大言海」が来ていると思うが」ということですぐに仕事が始まった。露伴は土橋に一々辞引を引かせるが、土橋はつぎのことを知った。われわれは辞書で知らないことを引くのだが露伴は知ってることを引くということを。できあがったものはシとチとに関聯のあることばを並べて一々簡単に説明を加えただけのものだが、それでおのずからにシとチとが同意の語であることを示しているのであった。それを持って帰ったので店の人も「三田文学」の関係者も喜んだ。雑誌が出てからほんとうに僅かな稿料を小石川の家へ持参すると、露伴はそれを土橋のほうへ押し返して「これは君に。調べものしてくれたお礼です、取っておいてください」と言った。それ以後これを最初に行われる「音幻論」の稿料は土橋が取った。そして単行本になったときの印税は本屋が貧乏で不払いに近く終った。「音幻論」からの利益は露伴はほとんど受けなかったのである。[29]

こうして土橋利彦は、露伴の口述筆記を受けることとなったが、露伴の需めに応じられるほどの知識はまだなかった。四苦八苦しながら、土橋は筆記を行い、自らも知識を伸ばしていくのである。『芭蕉七部集評釈』の残りは、土橋利彦を助手としてなるのだ。

その家へは翌月もう一度行ったことがある。連れて来ていた女中は徴用に取られてもういない。娘と孫とが代りばんこに来ては用事を済ましたり食事をつくったりしてくれるのだが、ちょうど文子が帰ったあとで露伴はひとりでいた。「音幻論」は連載で第一回はなかなか評判がよかったので第二回分を取りに来たのである。露伴は前田家本の新古今集を見ているところであった。この前田家本といったのは前田公爵家の書庫の蔵本を写真複製して実物そのままの形につくり、できるにしたがって学者に寄贈しているものである。露伴は慳貪の一つをそれにあてて丁寧に納めていた。その慳貪をここへ運ばせてあったのである。土橋は「音幻論」の筆記を済ませたあとの雑談で願いかなって七部集のほうの筆記もさせてもらえることになった。露伴は筆記をさせる以上は短時間に土橋に俳諧を敲きこもうとかかった。筆記といっても露伴の言う通りを書けばそれで足りるのではなく、一々の句のことを問いにつれて答えなくてはならない。一つ言ってだめなら二つ言い、三つ言ってだめなら四つ言うという具合に全部の考えを吐き出させられる。何ともくたびれるしごとではあった。[30]

露伴の身体はますます自由を失い、空襲は東京にも容赦なく襲いかかるようになる。空襲を受けて、父を守ろうとする娘と、娘のやり口が気に入らない父との凄絶なやりとりは、幸田文が記している。[31]

秋、父はめつきり弱り衰へ、足腰の不自由に黙々と耐へてゐた。私はしばしば静かさに不安を感じて、父の部屋を覗込みする癖がついた。十一月、東京は空襲された。親子は再び生死を、それも数分後には或は実際になるかも知れぬ生死を話すことになつた。しかし伊東の時のやうに多くをしやべる時間は無かつた。塀一ト重向うは防護団の溜りで、ラヂオやら絶叫やらはこちらの話をさまたげた。

こんな場合には死にざまは幾通りあるか知れないし、なほさら死に時のいつは計り得べきでない、そんなことはみんな思考のほかにあるのだから、あらかじめ決めて考へようとするのは自由を失うの愚であると云ひ、小机を前にして動きたがらず、庭さきの薔薇を眺めてゐる顔には久しぶりの表情があつた。将棋を差す時の、あの鼻の厚みの増して来る顔であつた。来ることはそのままに、すかつと受取つて滞らないのだとは、よくわかつている。が、その膝は薄く、その手の白くて骨立ち皺んでゐるのを見ては辛かつた。遠い爆風でも皮膚は木目のように壊れたとか、ガラスの破片は忍返しのやう

にささつてとかいふ話は、戦慄をもつて父の身に考へられ、またしても生き身の父を安泰に保ちたい思ひで、胸は一杯になった。

誰にしても素掘りの壕や押入を鉄壁と頼むわけのものでもないが、八十に近い日といへば常不断でも何か覆ふ物が欲しい気がするではないか。常識といはれる程度のあれこれの支度が、次々とせはしく思いめぐらされた。それに人手はまつたく無かつた。声をかければ或は得られる人手かも知れないが、非常時ゆゑなほ他人をわづらはせることをしまいと、ほんとに親一人子一人でゐる。頼る者の無いことは勇気を生じさせるが、又一方些末なことにまで分担を許されなかつた。私は防護団に叱り飛ばされながら、筵に水を打つたりせねばならなかった。マリヤとマルタの話が心に痛く思ひ出された。それもこれも僅かの間のこと、B29の爆音と続いて起つた破壊の轟音は、容赦無く処置の決定を迫つた。未知の予期された危険に対する興奮が、私を駆り立てた。すでに書物を疎開して荒涼たる部屋に、むきだしに一人すわった父は傷ましく、せめて押入にでも庇ひたくて、ろ骨にいやな顔するのを頼んだ。

「これがおまへ流の安全か」と皮肉り、「私は年寄だ、おまへの指図に従ふが至当だらう。一ト言云つておく、私に強ひたやうにおまへ自身にも強ひるだらうね。」ことばは穏かだったが、面をあげてゐられぬやうな怒りを受取つた。入口を布団で塞ぎ、その前にすわつて、さて寂しかつた。何がいけなかつたのだらう。押入がいやならいやと云へば済むこと、指図も何も無い。強ひるといつたとて手を取つてするわけぢやなし、今までだつて常に絶対であつた父だ。要するに空襲下に端座する父を平然と見てゐられないところがポイントであるとも思へた。いつも愛情といふものをあんなに悦びたふとぶ人が、今この際に古筵一枚でも庇ひにしたい子の情を、なんでかほどにまで拒絶するのか。ではこれは婢妾の愛といふものなのか、或は不謙遜にも当るものだつたらうか。猛火の図が思い出され、発狂といふことばがよみがへつた。ど、どつといふやうな音響が起り、あたりは揺れた。防護団が出動出動と叫んでゐる。不安と恐怖でこらへられず、「おとうさん」と呼んだ。

咎めが槍のやうに飛んで、「馬鹿め、そんな処にゐて。云つておいたぢやないか、どこへでも行つてろ。」張りつめた神経は自ら支へることを失つて、「このさなかにおとうさんのそばは離れられない、どこへ行くのもいやです、行きたかありません。」一トたびことばを返しては、われからずんと据わるものがあつた。「行きたいんぢやない、行けと云ふの

だ。」「いやです。」「強情つ張りな、貴様がそこにゐて何の足しになる。」「どうでもいいんです、おとうさんが殺されるなら文子も一緒の方がいいんです。どこの子だつて親と一緒にゐたいんです。」「いかん、許さん。一と二は違ふ、粗末は許さん。」「いいえ大事だからです。」「それが違ふ。おれが死んだら死んだとだけ思へ、念仏一遍それで終る。」「いやです、そんなの文子できません。」「できなくてもさうしかならない。」「では、おとうさんは文子の死ぬのを見てゐられますか。」片明りに見る父の顔は、ちよつと崩れて云つた。―「かまはん、それだけのことさ。」

ちひさい時から人も云ふ、愛されざるの子、不肖の子の長い思ひは沸き立つた。「それでは文子は何ですか。」「子さ。」「子とは何ですか。」「エエけちなこと云ふな、情とは別のものだわ」と怒声であつた。「それぢや文子のこのおとうさんを思ふ心はどうしますか。」「それでいいのだ。」「あんまり悲しい。」「悲しいにはじめからきまつてる。」―鼻の芯が痛く話は終つた。云ひたくて云へないものが、ゐしかつてゐたが、涙が塞いでゐる。水道は出なかつた。勝手の柱によりかかつて、云はれたことを反芻した。

爆音がしづまるとすぐにのべた床に横になつて、腰が痛いとこぼす父は、まだ不機嫌が続いて些細な事毎にひつかかつて来た。かうなつて来ると或一定の処までは許さず押すのがきまりになつてゐたが、この日は私の嫌ふところに触れて来た。以前の婚嫁先の悪風、それに染つて改めることをしない私の態度が挙げられ難詰され、畢竟けふのああいふ態度もあいふ愚問もそこから生じる、娘時代から思へば恐るべき退歩、驚くべき堕落だと、不断は思ひやりが深くて婚嫁先のことを云ふ時など代名詞でそつと云ふやうな優しい人が、今はぴしりぴしりとものを云つた。そこまでは耐へてゐた。その愚問を父は一々覚えてゐて抉つた。下性・下根・不勉強は取り出され、意地悪く切刻まれた。耐へられなくなつた私が、むしろ一度ことばをかへした経験が二度目を慣れさせたといふかたちになつたのがいけなかつた。父は利かない身体を起した。あつと云ふ間に後れ毛と一緒に襟髪を押へられた。痛さと、かつて無いことの驚きとで逆上した私は顫へ出し、振上げられた手を見て、「おとうさん打つんですか」と訊いた。手はおろされず、二三度こづいて放された。父は夜著を摑んで睨みつけてゐ、「わたしはな、おまへが帰つて来た時にどんなに、アアお幾美が生きてゐたらばと思つたか知れない。今又しみじみお幾美のゐないのが悲しい」と。余りのことに声も出ず唇を噛みしめ、介添して横にし、下がけをかけた。「我不敢軽於汝等、汝等皆当作仏故」と洩れたのを聞いた。

「我不敢軽於汝等、汝等皆当作仏故」は、鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』常不軽菩薩品第二十に見える常不軽菩薩の言葉である。常不軽菩薩は、釈尊の前世の一つで、在家出家男女を問わず、周囲の人々がみな成仏すると説きまわり、怒りを買って、迫害された菩薩である。口を極めて罵られ、石くれや木ぎれを投げつけられ、散々に打擲されてもなお、常不軽菩薩は「我不敢軽於汝等、汝等皆当作仏故」と唱える。「わたしはお前たちを軽んじたりはしない。お前たちはみな成仏するのだから」というこの言葉を口に上せて、露伴は愚かなる我が娘への嗔りを沈めようとしたのだった。

幸田文が空襲のさなかにもかかわらず露伴を防空壕へ入れなかったのは、一度防空壕へ入れた直後に寝付いたからである。見舞う人ごとに「文子が防空壕へ入れたから」と露伴は毒づいた。[32]

警戒警報が出たとき電話がかかって来て文子が出た。銀座の小さな出版社にいる青年なのだが、「お宅は先生のほか女のかたばかりなのでこれから参りましょうか」と言うのである。そこへ露伴が出て来て、「どこからだ」ときく。「あの土橋さんからですがすぐに来ましょうかって」と文子。露伴はつとこっちへ来て、「おれが出よう」と言う。文子が、「ただいま父が出るそうですから」とあちらへ言うと、露伴は娘が差出す受話器を取らずに壁につけてある電話の前を、「どうぞ御勝手に」と言いながら通り過ぎた。また文子が出て、「ああ申しておりますから」と電話を切った。やがて空襲警報が気味悪く鳴り響く。静かないいお天気で、平和だった日々のこういう日をちらりと思わせる。少したつと土橋が飛びこんで来た。「いよいよの時は私がおしょいして逃げます」とおぶい紐にする帯をかたえに置いて縁側に腰かけていた。露伴は庭さきに掘った防空壕に入れられていた。そこへ入って、「先生、石橋山の頼朝ですね」としゃれたつもりで声をかけると、「わしはそんなことを考えちゃいない」とおこるように言われた。空襲が解除になって穴から出て来たときも大の不機嫌で、近所にいる親戚の青年が扶けようとして手を出すのを払いのけてひとりで座敷へあがった。「土の下へもぐらされるのは御免だ」と娘に言った。それでそのつぎの空襲からは押入の上段と前とに蒲団をたかくし、下段へ入れることにした。土橋が来ることになった電話は、露伴が出るというのであわてていたら何だかよくわからない声がした。それは「どうぞ」と聞けばそのようにも聞かれる声だったので駈けつけたのだという。「御勝手に」のほうは全然耳に入らなかったのである。これは文子がずっとあとで土橋にきいて判明した。

たった一度防空壕へ入れられたあとで露伴は病気になった。そのせいだとして悪たれをついたがそういうことはあるまい。

重そうなようすなので武見を呼んだ。夜に入って来ると例の通り小さい鑢できりきりぽん、きりきりぽん、きりきりぽんとやってそれらをぷす、ぷす、ぷすとさして帰った。露伴がこの人に行かせた延子はこの音を聴いていて、「音楽のような速さだね」とあとで文子に話したという。それをぷつぷつと注射し終えると大抵はそれでおしまい。から壜は残して帰って行く。それぞれの壜についているペーパーを見た他の医者が、「いい薬がなくなった時代なのにどれもこれもほしいものばかりです。得難いものばかりだなあ」と嘆じた。

実は、この時、露伴の容態はかなり重かった。斉藤茂吉が、医師の立場で露伴を診たのはこうなる少し前のことであった。幸田文は記す[33]。

そのうち戦争は拡がるし、父は床に就いたきりになった。ある日先生は珍しく小さい鞄を持つて見え、「けふは医者でお見舞に来ました」といふことだつた。頑固者の父がお断りする、といふより拒絶といふすげなさを見せはしないかとあやぶんだが、すぐ静かに診察になつた。それまで先生は一度も父に聴診器をあててゐない、主治医先生へ礼儀を守つてのことらしかつた。おすすぎを持つて行くと、先生はとても嬉しさうに快活に話しながらなにか気の急く様子で、例の紅潮をしていつぱい汗が噴き出してゐる。複雑な興奮であることがわかる。お手水はほんの指先だけで済まされ、それを勝手へさげてお茶をさしあげるひまもなく、「お送りを」と父に呼ばれた。が、先生はそんなに急いで病室を出られたのに、玄関でぽとつと坐つたまんま深く頸を落して黙つてしまはれた。ぎしぎしと身に浸み入るものがあつた。と、「さすがに—」と途切れて、「—立派です」と、何が立派なのか訊く余地を与へないきびしさがあつた。帰つてしまはれたあとの頼りなさのうちに、ふと先生のはにかみが何であつたかが分明になりかかる気がした。それは私にあることを固く思ひかためさせるものだつた。父の死には是非先生にそばにゐていただきたいといふ願ひだつた。

やがて戦争は激しく、父の生命もまた激しい追ひたてられかたをしてゐた。空襲の夜、遂に主治医先生は万一を慮つて、「近い人々には知らせを」と云はれた。父のしごとの助手をしてゐた土橋さんが、あけがた早くゲートルを巻いて先生へ連絡に行つた。先生は驚かない、「私の診たとき、いや恐らくずつと以前からあのかたのからだはがたがたなのです。ただ不思議な調和で保つてゐたのです。今日まで持ちこたへて来た不思議ですから、不思議はまだ続くかもしれません。主

治医先生の指図通りになほ看病を」との私への伝言だった。父は持ちこたへた。

空襲が激しくなった昭和二十年三月、ようやく露伴は疎開を決意する。契機となったのは、長年不和のうちに過ごした後妻、八代の死であった。[34]

昭和二十年。信州坂城へ疎開し小石川の家を焼かれる。敗戦に終るとすぐ帰り、東京を素通りして伊東の宿に入る。

露伴はなかなか疎開しようとは言い出さなかったが東京の空襲が度重なるとついに言った。ところが露伴の家には地方に親戚というものがない。（略）そうなれば信州坂城の八代子の家しかない。八代子の家というのは戸倉に作った家ではなく、坂城の自分が生れ育った家が売りに出たので戸倉の家を売って買戻したのである。これも露伴には事後承諾であった。その家を露伴は見たことがなかった。坂城へ行ったこともなかった。見たことはないが八代子はむかし本陣だっただだっ広い家にひとりで住んでいるのであろう。（略）文子は父への愛と八代子へのいやさとの大きくいえば相剋に悩んでいたのである。それならどうして父とともに坂城へ行ってそこにとどまったかといえば、こういういきさつがあるうちに八代子の死が報ぜられたからである。

疎開は三月二十四日になった。まえの晩少し雨が降ったように思うがその日はどんよりと曇っていた。出発まえの支度をしている最中に鳥打帽に革の長靴を穿いたような岩波茂雄がはいって来た。（略）いよいよ出発になったときのことは覚えていない。先発の車が出てしばらくして露伴一家や小林が乗ったのが出た。上野ではさきに来た人々が駅から借りておいた担架に露伴をのせる。しかし改札口からは入れられないので誰かが交渉に行ったのかと思うがしばらく外で待った。なかなか来ないので担架が持ち重りして来る。そこへおろした。地べたではなく入口へあがって行く道なのだが、ともかくズック一重下は人が往来する堅い道で頭上は遮るもののない空である。若くして北海道から帰るのに二本松から郡山へ行く夜道に寝て、果はかかる姿で果てるのかと考えた人である。いまは果てるのではないが腰が立たなくなった病軀を道ばたに横たえている。露伴は目を見ひらくようにして人々の上にひろがった陰欝な空を眺めているようでもあった。交渉に行っていた誰かが戻って来て、「別の入口からさきにはいっていいことになった」と告げた。改札口のまえには人の列がどこまでも続いていたが担架といっしょに行く人々は別の口から入れてもらった。客は一人もいないホームを小走りに行

く。改札口があくまで間がないからである。車輛は三等しかない。向いあった座席に板を渡してその上に露伴は膝を立てて坐した。露伴が二人分の席にいるのだから男は一人立った。行くさきが遠くて立ちっきりでは疲れるから若い男同士でときどき変った。見送りには小林や横尾や次村が窓の外に立っていた。小林は本来なら送って行くべきだが岩波が貴族院の補欠に立って激戦中だというのでここから帰るのである。（略）列車が出てかなり長いあいだ露伴は不機嫌そうに口も利かないでいたが、そばにいた政吉の五男に物憂い調子で言った。「春寒というのと人々に運ばれて行くというのと車で行くというのとをあわせて句ができるか。私はいま作ったのだが」と。そして句を教えて、「春寒し手舁よりする汽車の旅」と言った。私が手帳を出して書きとめようとすると露伴が心覚えの帳面を出させて、詞書をつけて書かせた。実はここのところはあやしい。帳面と書いたがそれは製本見本で、岩波から届けさせて使っていた。

昭和二十年五月二十五日、空襲で小石川蝸牛庵は焼けた。父を蝸牛庵へ連れて帰りたい。そう思い、戦後の物資の乏しい時期になんとか工面をして建て始めた新蝸牛庵は、生きて露伴を迎えることはなかった。蝸牛庵を焼く火を幸田文は見ている。[35]

あの百姓家に一晩泊ったおり、東京が焼けてるというので起きて見たらそちらの空の下が一面に赤かった。いつまで見ていてもしかたがないのでまた寝たが、それは小石川の自分たちの家が焼ける火なのであった。

五月二十五日の夜、小石川の蝸牛庵はその他多くの家とともに焼けた。岩波の邸が焼けたのも同じ日のことで、目に見る一帯を焼野が原と化した大きな火であった。土橋は翌日上京して見に行った。上京といっても二時間ぐらいでお茶の水駅へ来られるのだから問題はない。ここがほとんど焼けどまりで火は坂下に及ばなかった。坂を降りて柳町の電車通まで行けば震災にも焼けなかった家も残っている。焼けあとで驚いたのはたしか商務印書館で出した漢籍の古典一揃いが随分の数で、それを二階書斎の廊下に積んであったのが家とともに焼け落ちて庭の一隅に堆くなったのだが、ことごとく灰になったのに文字は明らかに読める。またいい加減のところを出せば同じように読める。その翌日、土橋は焼けたことを知らせに坂城へ旅立った。寝ていて飲むキセルに火をつけてから露伴に報告した。キセルのさきがちょっと揺いだ。「ああああ焼けたのかい、そうかい。焼けるとは思わぬでもなかったが、何だね、感を新たにするというやつだ」と露伴が土橋の目を見つめるようにして言った。露伴はいままでの生涯に

水の害を受けたことは幾度かあったが火の災いに罹ったのはこれがはじめてであった。「おれが書いておいた原稿類も焼けたね」とやや鋭い調子になってきく。「いえ、先生のお書きになったものは手文庫ごとこちらへ持って来てあります」と答える。「あれは密陀僧の塗りで饗庭篁村から譲られたのだが」―そのまえは誰々のだったと江戸時代の人の名を言ったが忘れてしまった。土橋が何かに書いているかもしれない。つぎに、「釣道具は焼けたな」と露伴。「はい焼けました。そういうものはすぐに疎開できるように荷造りはできていましたのですが、やっとトラックをつかまえて約束しておいたのがきょうのことだったのです」と土橋。露伴は釣竿の話をしてくれた。「釣竿はね、白鷺・信天・翡翠・交青・属玉の兄弟竿が五本、それに横巻なしの継竿うぶ丸で、うん、名はみんな自分でつけたのだ」と。それから自分でこまの文字を書いた将棋のことをきいた。焼けていた。土橋が見たものも見なかったものもあるが焼失したもろもろの一部を挙げると、露伴がつくらせた大きな写真機・一絃琴・西鶴題名のひとよぎり・寺田寅彦が作らせて贈った平面ガラス板、次郎長のずぼんざしなどで、ずぼんざしというのはずぼんにさした刀である。また平面ガラス板というのは、世の中に寸分違わぬ平面なものは存在しないというのが露伴の持論なのだが、最も平面に近いガラス板を理化学研究所に命じて作らせて寺田が贈ったものである。

空襲が焼いたものについて、青木玉は別なものを思い出している。[36]

三十後半四十手前のころ、誰れか誘う人があったのか日本刺繍をしていた時がある。大きな木枠に布を張って基本の刺し方を習った。（略）

戦争は激しさを増し、私達は身一ツで疎開をすることになった。小石川の家の荷物は祖父の書物を一部疎開したが、生活すべて一切合財残してゆくことになった。気休めではあるが箪笥の引き出しは一応鍵がかかる。詰められるだけ物をつめ、もう一枚の着物も入らないわずかな隙間に、母は手元にあったありったけの刺繍糸を一面に敷き詰めた。糸は細い白ボール紙の筒型の芯に巻き付けてある。目もあやな数かずの色は、何段かの引き出しの最上部をうめつくして仕舞われた。

私達が家を離れる前日、残してゆく荷物の宰領を預けた人に、母は細かくここには何が入れてある、この包みはどうい

う必要のものが入っていると説明し、箪笥の引き出しも開けて見せた。相手は書物のことには明るいが衣類のことなど無頓着な人であった。ただ祖父の着るものは先生がお困りになってはとそれのみ一心に覚えようとした。その祖父の着物の上一面に砂糖細工の有平糖の巻物のようにつやつやと並んだ絹糸の美しさに声も無く眺め、彼は「何に使うものか知らないがこんな美しいものも焼けてしまうのか」と呟いたという。

そんな思いは焼夷弾の火の前には無力であり、結果はその通りになって、糸はさておき母の刺した帯さえ一本も残らなかった。

露伴亡き後、新築なった新蝸牛庵に戻った幸田文は、焼跡のなかから、父につながるものを見つける。[37]

私の住んでゐる家は小石川表町の焼けあと。父はここに大正末期から戦火にあふ一ト月まへまで約二十年を過した場処である。さきごろ引きうつつた当座は、つらにくいほど頑強な藜の根と、割栗石のやうにしきつめた焼瓦を見て、いささかうんざり気味でゐたが、今はもうさうぢやない。すばらしいと思つてゐる。

火事跡は思ひ出の宝石箱である。土の中にはいろんな物がある。かつては地上にあつてそれぞれの役に生きてゐたが、いまは壊れて用をなさぬもの、たとへば瀬戸物のかけら、ゆがんだ金物などが埋もれてゐる。土は風にをどり雨に沈みして、一刻も早くおちつきたげに見えるが、土中の物は逆になにかにつけて、陽の目を恋うて浮きだして来る。それらを見れば、何もみな思い出でないものは無く、ことにも父と直接につながつてゐたものに逢つては、なつかしさに天を仰いで呼びたく、さびしさに地に伏して泣きたいおもひがする。

けさも、はつとする思ひにあつた。崩れた霜柱のかげに、きらりと藍が光つてゐ、それは一ト目でしかとわかつた。ずつと以前、父が愛用して放さなかつた、盃台のかけらであつた。京もの、やや平たい壺なり、祥瑞うつし。これは母がゐた頃からあるのだといふから、四十年近くも前からのものであり、おそらく母はこれに盃を載せ、小器用な肴を添へて供したこととおもへる。

継母はクリスチャンで、飲食の膳を不潔だと顰蹙して嫌つたが、強引な父には勝てず、やはり酒を調へなくてはならなかつたのだが、酒器を愛する気などは毛頭無かった。（略）継母はリョーマチを病み、家事は私がひきつがされ、そのとき改めて見た盃類は、ぐつと数がへつて、箱も浅い杉折にか

はつてゐた。

私は学生でゐて家事雑役を引受けさせられたのだから、食事の跡かたづけなどは早業第一と心得てやつたから、おそろしく手荒く乱暴だつた。（略）父も閉口して、「おまへはぶつこはし屋の女房にでもなるか」と頭に手をやつて嘆息し、私もすこししよげた。父がこの盃台に寄せる愛惜をおもつては、さすがの私も気をつかつたので、幸に事無く過ぎて来たが、あるとき玉の盃をめがけにしたのを最後にして、私のぶつこはし屋がをさまるより一ト足早く、父の方があきらめに行きついたのであつた。（略）

私のかたづいた先は新川の酒問屋であつた。（略）

数年ののち私は離婚し、酒とは縁が切れ、子供の父だつた人もまた病歿した。（略）過ぎた夏には父も亦、境を異にする国に旅立つた。いま霜に浮いてあらはれた、この陶片は白く青くあまりに美しく、私はふたたび人の見る目にまかせたくない思ひに駆られ、こなごなに砕いて土にかへしてしまつた。

露伴と酒は切っても切れない。毎晩の膳に運ばれた盃台のかけらを、幸田文は二度と人目に付かぬよう、粉々に砕く。盃台は、父だけでなく、早くに亡くした生母につながる器であった。

長野の生活は思いに任せず、他人から見ても、辛い生活であった。その原因の一つは、後妻八代との不和から、八代が坂城に別居して以降、その死までほぼ没交渉に過ぎた露伴一家と、八代を看取った信州の親族との坂城の家の所有権をめぐる諍いにあった。小林勇は、次のように記している[38]。

坂城の先生を見舞った。四月四日のことである。（略）先生の家は古びて大きかった。その大きな家の表座敷の方に幸田家が入り、裏の方に八代夫人の親戚だという一家が住んでいた。この家の女房が八代夫人の姪にあたるという。その姪の人が八代夫人の世話をしたという。

（略）台所が一つで先住者たちが我侭に使っているということであった。（略）

裏の方にいる一家の主婦は田舎の、理非をわきまえぬ中年女で、東京から来た歓迎しない客人に一々辛く当たった。なんでも八代夫人がこの姪に自分が死んだあとは、この家をやるといったから、これは自分のものだと主張しているのである。（略）

先生は彼らの理不尽な主張を私に一通り話した。そして、「この老人がどこへ行けというのだ。」といって嗚咽した。（略）先生一家は確かに東京の危険から難を避け得られたが、山深

いこの坂城の町で新しい難儀に取囲まれているのだ。この家の人たちが、理非をわきまえぬならば、恐らく町の人々も先生一家を正当に見ず、親切には扱わないであろう。

小林の見たとおり、坂城での生活は、時を経るに従い、耐えがたく辛いものとなっていった。[39] 昭和十五年から、蝸牛庵を訪れていた内田誠が露伴の死後出版した『落穂抄――露伴先生に聞いた話』には、疎開のわびしい様子が活写されている。露伴は、信州についてこんな言葉を残した。

信州といふ處は昔から戰爭にまけたものが逃こんで來るところである。諏訪神社の祭神である建御名方神がさうだ。[40]

先生の疎開先であった、信州阪城は先生を路傍の草の如く扱っていた。阪城の生活は悲劇だった。先生は我々に向って、昔から信州は戰爭に負けた人間が逃げこんでくるとこさと笑はれるだけであった。

一體世の中はなぜ生きてゐる幸田露伴を大事にしなかったのだらうか。[41]

「路傍の草の如く扱っていた」とは、いかに疎開先の生活が敵意に満ち、露伴に敬意を欠いたものだったかを明らかにして余りある。

こうした困難な生活の中で、露伴は一人楽しむ術を知っていた。

晩年床についたきりにおなりになってからは、目もお悪るく、耳も遠くおなりであったので、口述などをなされる以外、文章もかかれることもなく、本も讀まれることはなかったので、何もなさらず、さうしてゐらして何をお考へでせうかとうかがってみたら、

「なに、昔のことをいろいろ思ひ出してみては樂しむでゐますよ。」

ほんとうに樂しさうであった。[42]

坂城では、幸田文は手持ち無沙汰で、日永一日トランプ占いをしていた。[43]

とにもかくにも、露伴は戦争に耐え、辛くも生き長らえ、終戦を迎えた。坂城では、『芭蕉七部集評釈』の「曠野下」が成った。土橋利彦はその時のことを次のように記す。[44]

七部集のうち「冬の日」には発句の部はなく、「春の日」の発句はすでに評釈を終え、「ひさご」にも発句の部はなく、「猿簑」の発句は連句とともに文庫として売り出されていて、残

るものは「曠野」「炭俵」「続猿簑」の三冊なのである。そうするともう半分道は来たように思われるが、「曠野」の発句がやたらに多くてそれをある程度やりあげなくては半分あげたとは言えない。本になったのからいうと「曠野」ばかりは二冊になって全部で八冊になる。その「曠野」の下巻に出ている発句の部は坂城で成ったのである。参考書は何もないところでやりあげた。戦争中ただこれだけ残った「文芸」に連載している「音幻論」の原稿を取りに土橋が月に少くとも一度は行く。しかしこちらのほうには露伴はなかなか乗って来ないようになった。一日空しく待っていることはできないので機械的に調べて行けばいい「音の各論」などは予め土橋が認めて行って一読することにした。そのあとの時間には「曠野」を口授してもらって筆記した。口授の態度は一様でなく、談話体で土橋に説明したあとで、「ということを約めて書いておいてくれ」ということも時にはあった。襖一つ向うには文子親子がいて、土橋が筆記した原稿を持って引上げて来ると、聴いていて感じた悪口を二人で浴びせる。それでもこの部屋へ来ると土橋はほっとするのであった。年が経ってから文子が言った。「あのころのあなたの進歩は目を見はらせるものがあったわね。あのあとはだめになったけど」と。自分は露伴の手伝いをしていたつもりだったのが、それはそうにしても自分自身の目ざましい進歩にもなっていたのである。人々が戦争で学問ができなくなったその時代に土橋は一世一代の修行を積んでいたということになる。

坂城を離れる日が来たが、露伴は一歩も歩けないのである。戦争が終ったのだからすぐに帰ろうと露伴が言い出したのでそうすることにした。しかし東京の家は焼けてしまったので東京は素通りして伊東の宿へ行くことにした。この家は文子の一存で相手の胴欲な女に与えられたからである。もとより文子はいい気持ではなかった。女の背後にはもっと強い男の力がついていてこんな世の中で自分の力では事面倒と思った。こういう折にはこの人の思いきりが実によかった。黒塗の四角な盆に林檎が二十ぐらい積んで出してあったが家人は現われなかった。林檎を手に取る人はなかった。暗い雨の中で電燈をつけて支度をした。呼んでおいた自動車が来たのでまだまっ暗な雨のなかで露伴を運ぶ。一駅向うの上田へやらせる。今度の汽車は坂城へは停らずに上田まで行くと聞いたからであろう。上田は人も知る如く真田の城あとがあるところで、ことに真田幸村を嫌う露伴がそこから汽車に乗った。途中熊谷駅へ入るところで線路に隣った家が焼けていた。徐行したりほんのちょっととまったりしていたので焼けている家のなかを眺める時間があった。焼けている家をこんなに近

くで見たことはなかった。どうして起った昼火事かは知らないが、直覚的に飛行機の爆撃と感じた。戦争はきのう終ってもまだ時々飛行機がやって来ては家を焼いた。戦争が終ってから焼かれたのだからさぞくやしいだろうとも思った。列車は上野に着きさらに東京駅から別な線の車に乗る。

東京駅では露伴をおぶって階段をあがるのは苦労だろうと貨物をプラットホームへあげるエレベーターに載せてくれた。ただしまわりに壁はないのでまんなかに椅子を置いて露伴を腰かけさせ、「からだを動かさないようにしてください」と注意して引上げた。まだ乗って来ない車に乗せてもらった。土橋の母がはいって来て露伴に会うのははじめてだったがさめざめと泣いた。あとで、「あの人は泣いてばかりいたね」と露伴が文子に言ったそうである。伊東は大雨で被害がいくらか報じられていた。一行は駅長室へ入れられて露伴にはソファーが与えられた。これから行くつもりの松林館とは電話が切れたかして長いあいだ連絡がつかないようであった。やっと連絡がついたが松林館は大入りでこれだけの人数を迎えることができないという。「父だけでも」と言っても、「あすにならなくては」という返辞である。二軒になってもいいから一晩だけ過せる宿を捜してもらう。名は正確に覚えていないがたしか臼井館という宿の主人が一度露伴先生にお泊りいただきたかったと言って一室あけてくれた。露伴にばあやをつけてそこへ頼みこむ。[45]

伊東でしばらく過ごした後、露伴は菅野へ移るのである。

露伴臨終の地となった菅野で、畢生の大著『芭蕉七部集評釈』は完成した。しかし、それは、盲いた露伴が、まともな資料もないままに、ともかくも完成させたものなのであり、必ずしも、意に満たない部分があったと思われる。傍で『芭蕉七部集評釈』著述の様子を見守っていた幸田文は、父の苦労を思いながら、次のように書いている。[46]

評釈のしごとは、なにぶんにも七部集が大部なもので、はじめは七部全部にわたるつもりもなく、気に入つたところを気任せにする、といつたしごとだつたらしいが、したりやめたりしてゐるうちに、「冬の日」「春の日」と連歌の部がみな済んでゐた。それから約十年を過ぎて、今度は「猿蓑」の発句にかかつたが、それもいつか済んだとなると、なんとなくやめるにやめられない、ここでやめるとおけらの水渡りのやうな中途半端なかたちになるので、それならいつそ全部やつてみるかといふところになつて、あの戦争だつた。齢もとつてゐたし、戦争の窮乏がこたへて持病の腎臓が悪化する、風邪

のひどいのを引く、癇性な人が敷きつぱなしの床に寝たり起きたりだが、病むたびに起きてゐられる時間がだんだんと少く、つひには寝たきりになつた。眼もめつきりと暗くなつてしまつて、眼鏡もこれより工夫のしやうのない極限の度のをかけて、そのうへツァイスの特別拡大鏡を使つても五号がまづかつた。文字と文章に慣れた眼だから一字一字がはつきりしなくても読めはするが、それをすると眼にもからだにも相当な負担だつた。評釈のやうな、あつちの本を調べたりこつちの本に当つたりする必要があるしごとは、小まめにからだの動かせるあひだでなくてはできないしごとだつた。そこへ幸に小橋さんといふ助手を得たが、ところが今度は火事だつた。戦災で手許においた参考書類や資料は全部焼いてしまふし、それも焼けたのはうちばかりではない、どこもかしこも焼けてゐるのだから、不急な俳諧書などがさう早く集まつて来るわけにはいかない。買はうにも調へようにも打つ手がないが、それかといつて安閑と待つてもゐられない、すでに父は八十だつた。

「しごとをし残して死ぬのは、それこそ片付かないおやぢといふものだ。とにもかくにもやつてしまはう」と父はそんなことを云つた。とにもかくにもといふが、これはおそらく父にとつて不本意至極の、どうにもならないとにもかくにもだつたらう。眼が悪くてからだが動かないのではしやうがない。でも、あるいは父一流のずぼんとした大まかさで、とにもかくにもと云ったのかもしれない。ちゃうどいのちのはうも一回の終りになりさうなのだから、しごとのはうもいい加減一応のきりにしておけといつた、のんきな脱けかただつたともおもへる。が、悪条件のなかで強情なしごとが進んで行つた。さういふしごとの出来上りがかならずしも満足とは行かず、きつとどこかに不満足が残つてしまふのも承知の上であつたやうだ。今そのしごとが終らうといふ。しごとが終るといふことは、私には私なりに多少に感懐はあるけれど、特別の緊張感などはなかつた。ただむやみと冷えるのには閉口しながら、ぽつんとすわつてゐるのである。それも大部分は小橋さんへの遠慮からで、小橋さんは前々から、もう何日ぐらゐで終りさうだなどと予告をして気負つてゐたので、さきへ寝てしまふのは憚られた。

八畳からは口授の声が断続して聞えてゐた。低いから心をとめて聴いてゐれば何を云つてるのかもわかるが、気を放せばもうわからなくなる。私は睡るともなく居睡つた。小橋さんが夜なかも何も忘れたやうな声で、「おめでたうございます」と云つたので気がつく。—あら、をかしい。うちぢやあんなことを云つたためしはないのに、と思ふ。（略）

父はいつも黙つてしごとをし、黙つてしごとを終へ、始まつたともなく終つたともなく、祝ふことなんぞないのがあたりまへになつてゐたからである。

文中、「小橋」は「土橋利彦」の仮名である。

幸田文は身体の利かなくなった老父に仕えて、『芭蕉七部集評釈』を完成させた。青木玉は学校に通いながら、母を支えた。二人の母娘は、夜は耳をそばだてて襖の向こうから病人の気配を伺い、事あれば機敏に処置し、偉大なる幸田露伴を看取り、ものを書く人になっていく。

ただ、父の死までは、世間的には普通の主婦に過ぎなかった幸田文にとって、文筆業での成功では、予想外のことが起きすぎた。昭和二十五年（一九五〇）、幸田文は一旦筆を絶つことを宣言する。[47]

私は筆を絶つ

幸田文さんの決意／その『書かざるの記』

故幸田露伴翁の娘文さんは父の思い出につながる『勲章』『みそつかす』などの作品が戦後の文壇に華々しく登場、特異な存在となつて来たが、最近ばつたり筆を絶って沈黙してしまい『文さんは今後ものを書かない決心をしたらしい』という噂が伝えられはじめた。何が文さんを駆つてその決心に追いつめたか、文京区表町伝通院裏、かつての蝸牛庵跡に建てられた住いに文さんを訪ねてその心境をたたいてみた、以下は文さんの語る文筆を絶つ理由であるが、文学に対する潔癖とまでいえるきびしい心であり、またギリギリに思いつめた人間の誠実と愛情の問題でもあつた。

父の死後約三年、私はずらずら文章を書いて過して来てしまいました、私が賢ければもつと前にやめていたのでしようが、鈍根のためいままで来てしまつたのです、元来私はものを書くのが好きでないので締切間際までほつておき、ギリギリになつた時に大いそぎで間に合わせ、私としてはいつもその出来が心配でしたが、出てみるとそれが何と一字一句練つたよい文章だとか、いろいろほめられたりするのです、やつつけ仕事ともいえるくらいの私の文章が人様からそんなにいわれると、私は顔から火が出るような恥かしさを感じました、自分として努力せずにやつたことが、人からほめられるということはおそろしいことです、このまま私が文章を書いてゆくとしたら、それは恥を知らざるものですし、努力しないで生きてゆくことは幸田の家としてもない生き方なのです。

私はほかの作家の人たちのことを思つても、書くということはあらゆる努力を集中して、やつと出来る仕事だと思いますし、またそれでなければ本当の文章だとはいえないのだと

思います、私が文章を書くのはもち論努力はしましたが、父が死ぬまでの間私が生き抜くためにして来た努力に比べれば、それは努力とはいえない底のものでした、私は努力にも段階があると思うのですが、私が文章を書く努力は私として最高のものではなかつたような気がするので、それでは本当の文章とはいえないでしょう。

ではなぜ私が文章を書くようになつたかといいますと、父の死ぬ少し前に私にものを書くようにといつてくれた人があつたのです、その時の私のうれしさ、父のことも子供のことも忘れ果ててぼう然とする位でした、というのは四十何年の間、私は終始、みそッかすで、たれも私を認めず、私は父の下でいつもオドオドして何をしても叱られるばかり、ほめられたことは一度もなく、たまに御飯の出来がよくても『わしのいう通りにやつたからだ』といわれる始末で、ほめられたり、特に私というものが認められることは全然なかつたから、〝私に〟といつて、書くようにすすめられた時はほんとうにうれしかつたのでしたが、私はこの時にはじめて人の愛に触れたと思いました。

私は『文さん』といつて呼びかけてくれた人のために書き、その後も同じようにして書いて来ました、それから編集者の方も読者の方もほんとうに私を愛して下さいました、四十を越してはじめて人の愛を知りました。

そういつて文さんは目に一ぱい涙を浮べた、

文の一生にもとうとう愛されたということがあつたと思えば、もうこれからだれに愛されなくても私には満足です、この三年の思い出だけで私には十分だという気がするのです、私を愛して下さる人々に私として精魂傾け、切さたく磨の努力を重ねたとはいい切れない文章を読んでいただくとしたら、それは誠実のないことですし、徳義の上からも許されないでしょう。

文章を書いてお金をとるよりも、私は人にも自分にも誠実でなければなりません、そう思えば私は書くことをやめる以外にありません、ただ連載になつている『みそつかす』だけは急にやめては無責任ですし、ある程度書きつづける義務があると思います。

愛されることの薄かつた私には、この三年は有頂天でしたが、それだけに、いまの私が本当の私かしらと思うのです、やはり私には持つて生れた私の生き方があるのです、思えばこの三年は浮気だつたのですよ、その思い出を持つてまたもとの私にかえるのです。

書かない決心ですが、人間のことですからあるいはまた書きたくなるかもしれません、その時には父の思い出から離れ

て何でも書ける人間としてでなくてはなりませんし、そうなつたらどんなに悪くいわれようとも書かなくては済まないでしよう、そうなるかならないか、私にはわかりません、私は間違つているのでしょうか。

この後、柳橋の芸者置屋に女中として住み込んで、働きを認められた幸田文は、自信を取り戻して、再び筆を執り、『流れる』を世に送るのである。

注

（1）幸田文については『幸田文全集』一～五、岩波書店、一九九四年十二月～一九九五年四月。仮名遣いは全集に従い、踊り字は文字に開く。青木玉についてはまだ定本が存在しないので、それぞれ単行本を用いる。『小石川の家』講談社、一九九四年八月。同『なんでもない話』初出は朝日新聞日曜版連載、一九九六年四月七日～一九九七年三月三十一日。その後講談社より一九九七年九月同名単行本として出版。同『幸田文の箪笥の引き出し』新潮社、一九九五年五月。塩谷賛『幸田露伴　下』中央公論社、一九六八年十一月。

（2）小林勇『蝸牛庵訪問記（露伴先生の晩年）』昭和三十一年三月十日、岩波書店による。小林の書は、担当編集者として、露伴の元を訪れた後に自ら記した手控えを基に、「他のいくつかのノートの助けをかり」て書かれた（同書、六～七頁）。なお、本書では新旧の漢字が混淆しているため、字体は正字に統一する。

（3）幸田文「あとがき」『こんなこと』（『幸田文全集』第一巻所収）、二三一～二三二頁。単行本『こんなこと』の初版は一九五〇年八月三十日、創元社。「あとがき」は一九五一年一月刊の第五版に初めて掲載される。

（4）幸田文「みそつかすのことば」『みそつかす』（『幸田文全集』第二巻所収）、一六七頁。初出は単行本『みそつかす』刊行時の書き下ろし。「（三月二十七日）」の記載がある。

（5）「安倍、小宮、和辻とか云ふ人達を別にして作家らしい人の顔はまるで見えなかつた。ただ川端康成氏一人、暑さうにまるい眼をひからせながらやつてきた。（略）我々は千人に一人といふ人を失つたのだ。世間の何人がそれを知つてゐたのだらう。總理大臣と議會だけだつたのだらうか」。内田誠「露けし」「落穂抄」所収『落穂抄――露伴先生に聞いた話』青山書院、昭和二十三年十一月、一四〇～一四一頁。

（6）塩谷賛「仙書参同契」『幸田露伴　下』三七二～三七三頁。

（7）同前、三八〇～三八一頁。

（8）塩谷のこの記述は、小林勇「昭和十六年」『蝸牛庵訪問記』二四一～二四二頁に基づく。

（9）塩谷賛「仙書参同契」四〇四～四〇五頁。

（10）小林勇「昭和十六年」二四五頁。

（11）青木玉「喜寿のあと」『小石川の家』一二四～一二五頁。

（12）塩谷賛「仙書参同契」四〇四～四〇五頁

（13）同「大患」『幸田露伴　下』四一三頁。

（14）同「大患」四〇六頁。

（15）同前、四一二頁。

（16）小林勇「昭和十七年　岩波の會・香の本」『蝸牛庵訪問記』二五二～二五三頁。（　）は筆者が補った。

（17）塩谷賛「大患」四一三～四一五頁。

（18）同「蝸牛庵聯話」『幸田露伴　下』四一六頁。

(19) 同前、四二八～四二九頁。
(20) 幸田文「終焉」『幸田文全集』第一巻、二五六～二五九頁。初出は一九四七年十月二十日発行の『文学』露伴追悼号。『ちぎれ雲』一九五六年、新潮社刊に収録。
(21) 青木玉「いも」『なんでもない話』一三三頁。連載中に読者から指摘があったが、単行本収録時には結局「しょきょう」と平仮名のままにした。
(22) 幸田文「菅野の記」『父』(『幸田文全集』第一巻所収)、六八～六九頁、初出は一九五〇年一月一日発行『中央公論文芸特集』に「渚の家」の表題で発表。『父――その死』(中央公論社、一九四九年十二月二十日刊)に「菅野の記」の表題で収録。
(23) 「勲章」は一九四九年三月一日発行の『文學界』に掲載。その経緯を記した「「勲章」」は『幸田文全集』第十二巻所収。初出は一九六二年三月十四日発行『朝日新聞』朝刊の〈わが小説〉欄に「「勲章」――〝随筆だ〟と我を張る」の題で掲載。引用は全集、三〇七～三〇八頁。
(24) 「「談話」おぼえていること(一)青木玉」『幸田文全集』第八巻、月報八、一九九五年七月。
(25) 注(23)に同じ。三〇七～三〇八頁。
(26) 幸田文・石川淳・大野晋・丸谷才一「座談会　東京ことば」(初出『図書』一九八〇年一月号、底本『日本語そして言葉』集英社)『文藝別冊　総特集　幸田文　没後十年』河出書房新社、二〇〇〇年十二月、九〇～九一頁。
(27) 塩谷賛「空襲」『幸田露伴　下』四三五頁。
(28) 同前、四四二頁。
(29) 同前、四四〇頁。
(30) 同前、四四〇～四四一頁。
(31) 幸田文「終焉」『幸田文全集』第一巻、二五九～二六三頁。初出『文学』一九四七年十月二十日。
(32) 塩谷賛「空襲」四四六～四四九頁。
(33) 幸田文「はにかみ」『幸田文全集』第三巻、二三一～二三三頁。初出は一九五三年四月十五日、岩波書店刊の『斉藤茂吉全集』月報第十二号に掲載。末尾に「(二月二十三日)」とある。『ちぎれ雲』に「斎藤先生三題」のうちの第二話として収録。
(34) 塩谷賛「蝸牛庵焼かれる」『幸田露伴　下』四五一～四五四頁。
(35) 同前、四五八～四五九頁。
(36) 青木玉「花模様」『幸田文の箪笥の引き出し』一五〇、一五二、一五四頁。
(37) 幸田文「かけら」『幸田文全集』第一巻、二六七～二七一頁。初出は『週刊朝日』一九四八年二月二十一日、のち『ちぎれ雲』に収録。
(38) 小林勇「昭和二十年　坂城にて」『蝸牛庵訪問記』二八八～二八九頁。なお、小林勇はこの直後五月九日に公安当局に身柄を拘束され、厳しい取り調べを受け、敗戦二週間後の八月二十九日釈放される。
(39) 同「戦争終わる」『蝸牛庵訪問記』二九六頁。
(40) 内田誠「落穂抄」一一三　『落穂抄――露伴先生に聞いた話』九四頁。
(41) 同「幸田露伴先生」『落穂抄――露伴先生に聞いた話』一三四～一三五頁。
(42) 同「續落穂抄」『落穂抄――露伴先生に聞いた話』二七、一一二頁。
(43) 塩谷賛「蝸牛庵焼かれる」四五五頁。
(44) 同前、四五九～四六〇頁。
(45) 同前、四六二～四六三頁。
(46) 幸田文「段」『幸田文全集』第三巻、三八三～三八八頁。初出は、一九五四年六月一日発行の『俳句』に掲載、『黒い裾』に収録。
(47) 昭和二十五年四月七日『夕刊毎日新聞』掲載。『幸田文全集』第四巻、月報四、一九九五年三月所収、岩波書店。